

# 木原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く 92

## 県指定文化財 福田寺御殿修理

— マザーレイク応援寄付金を活用① —

### 湖岸の大伽藍

湖岸の長沢集落の真ん中にひときわ大きくそびえる屋根は、浄土真宗本願寺派の古刹・福田寺です。「長沢御坊」とも呼ばれ、「息長寺」の別名が示すように、古来、朝廷と関わりが深かった豪族息長氏の菩提寺でもありました。

境内には県指定有形文化財の御殿（書院）や国の名勝庭園、蓮如お手植えの松などがあります。一角に建つ「殉教万人塚」は、戦国時代、時の住職覚芸が、真宗を護るために湖北十カ寺の信徒を率いて、浅井氏とともに織田信長と戦った際の犠牲者を弔うものです。毎年五月と十一月におこなわれる「奴振り」は、二世摂専の内室として二条家の姫がお輿入れした時に随従してきた奴の公家振りといわれ県無形民俗文化財になっています。

福田寺はもともと布施山息長寺成徳院と号し、場所も旧黒田村大字蘭原（長浜市南東部）にありました。正安年間（一二九九〜〇二）、天台宗から真宗に改まり、延元四年（一三三九）に現在地に移転したと伝えられています。

御殿は庭園に面し、桁行七・五間、梁間四・五間、その南側と西側に鞘の間（畳敷きの縁側）をつけ、東側には玄関が付属しています。北側は廊下になっていますが、このあたりは若干改良がくわえられています。御殿内部は田の字型に八間に区切り、西端の二間は床が一段高く「上段の間」になっています。上段の南側は花頭窓の附書院をつけ、北の間は床をもっています。寺では「浅井御殿」と称して、小谷城から移築したものと伝えられています。福田寺と浅井氏とは関係が深く、先の覚芸の戦いのほか、一二

世正芸は浅井長政の遺児萬菊丸ともいわれ、浅井家から御殿が移築される背景はありますが、現御殿の建築年代は様式・手法からみて、しいていえば寛文頃（一六六一〜七二）に営まれたものとされています。小谷城からの移転説は、現御殿以前の建物に関する伝承がそのまま残っているのかもしれませんが。

御殿の用途としては、私的な法主の衣装の間と、公的な法主の対面の場があり、御殿というより対面的な性格だったようです。真宗寺院の対面所としては、長浜大通寺広間、大津別院対面所に続くもので貴重な遺構です。

### 屋根の葺き修理

福田寺御殿の屋根は「茅葺き」の技法で葺かれています。茅葺きとは、「茅（ススキ）」で葺いた屋根葺き技法のみを示すものと思われがちですが、草の種類を問わず、草で葺いた屋根技法を示す総称としても用いられる言葉です。福田寺御殿の屋根には、葺が使用されています。茅葺の屋根は、おおむね二〇年程度で腐朽や抜け落ち等の痛みが生じてくるので、その都度、屋根の修理を繰り返す必要があります。

修理方法には、いちから新材で葺き上げる修理と、「差し屋根」と呼ばれる、傷んだ部分の葺き材を抜いたり、切り取ったりして、新しい葺き材を差し込む方法があります。

今回の修理は、強風や冬の積雪などの影響により葺の抜け落ちが著しい北面の全面差し屋根とその他の三面の破損個所の差し屋根をおこないます。滋賀県のマザーレイク応援寄付金を活用しています。十一月一日（日）午前10時40分から現地見学会を開催します。

（歴史・文化財保護室）



▲ 福田寺御殿